二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

獣淫の奴隷姫 リルフィ

小説 斐芝嘉和
挿絵 ヤツシマテツヤ

第一章　夷奴族の姫　006
第二章　倭人の陣　025
第三章　妖術師・幻聖　035
第四章　処女弄り　048
第五章　家畜姫　084
第六章　匂い　122
第七章　狼閨　165
第八章　獣の宴　199
終章　249

登場人物紹介

Characters

リルフィ

自然とともに生き、動物や森の精霊の声を聞いて村人を導く夷奴(いぬ)族の巫女姫。心優しい性格で、村人からも慕われている。

ムンテ

長い年月を生き、特殊な力を身に付けた狼の獣神。

柳川光照(やながわみつてる)

夷奴族の土地を侵略するために他国からやってきた男。

幻聖(げんせい)

柳川の部下で、妖しげな術を使う老人。

『第四章　処女弄り』より

声をあげる間もあらばこそ、肉畝に貼りついていた薄布の端が抓まれ、剥くように捲られて、横へずらされてしまった。

プルンッ！

瑞々しい弾力を示して飛び出した柔肉は、頬紅を擦り込んだように艶やかな紅。

「ほほう、これはこれは……」

「なんとお美しい――姫様らしい、清楚な御本尊でござるな。いやあ、眼福眼福」

覗き込むふたりの男が、目を血走らせて獣の笑みを深めた。

胡座を組まされているために伸びやかな太股がハの字に開き、リルフィのソコは自然に口を開いていた。空気に撫でられて恥ずかしそうに震える花弁はもちろん、潤みの底にひっそりと息づいている膣穴も、淑やかにキュッと閉まった小便の孔も、薄く滲んだ蜜に濡れてヌメヌメと輝き、薄闇の中にぼんやり紅く浮き上がって見える。

全体の印象からいえば、身体の割にあどけない秘部だ。

ぽってりとした柔肉の狭間、熟しきってはいない乙女のビラビラは、降り注ぐ眼差しを浴びて羞じらうように、躊躇(ためら)いがちに咲いていた。リルフィの乱れた吐息に合わせて震える縁はまだ襞が浅く、淫唇というよりはただの膜に近い。

その奥の、清純の証を秘めた肉穴は、指ですら入りそうにないほど小さかった。が、透明感のある紅い粘膜は喘ぐようにヒクついていて、なにかを求めているようだ。

紅く色づいた肉畝の端、ほっそりとした莢からは、身体の中でもっとも敏感な肉豆がほんの少しだけ顔を覗かせていた。まだ薄い包皮にくるまれているが、尖端はわずかに開き、甘蜜を滲ませて健気に強張った肉芽がわずかに先を見せている。大きさは米粒くらい、それと思って見なければ見落としてしまうだろう。

色はヌメヌメと紅いが、形は幼い。ふたりの男に弄られていやらしく濡れているが、己の指すらろくに知らないだろうことは見ただけで分かる。

「尻の割に、ずいぶんあどけない御本尊だのう。色も淡い。鮭の切り身のようじゃ」

柳川が感心したように頷くが、褒められたような気はしない。

当たり前だ。

そこは恥ずかしい場所、他人に見せてはいけない場所――巫女姫の神秘が宿る、決して冒してはならぬ聖地だ。

「じ、じろじろ見るな、無礼者ッ！」

上擦る声を振り絞り、懸命に威厳を保って叫んだが。

「見ただけで済むわけはなかろう、夷奴姫」

「さよう、これからが本番でござる」

ニヤついた男たちの指先が肉畝に触れ、左右に掻き割られた。薄く濡れた紅い花弁が薄闇の中に咲きこぼれ、瑞々しい牝香を立ち上らせる。

「く……うぅ……やめ、な、さいっ！」
紅く潤んだビラビラの縁が、硬い指先にツウッと撫でられた。反対側の粘膜花弁は軽く抓まれ、引っ張られ、柔らかさを確かめるように折り曲げられる。
（なに、これ……!?）
弄られた場所に、不思議な感覚が湧き起こった。くすぐったく、温かく、痺れるような――喩えることが難しい、妙やかな感覚。男たちの指がわずかに動くたびジッとしていられないようなむず痒さが溜まり、秘裂が焦れったくなる。こらえることが難しいもどかしさは左右の肉畝にも広がり、仰向いた尻穴がキュウッと窄まる。
「ほほう、新しい蜜が滲んできたのう。感じておるのか」
「か、感じ、る……？」
自慰すら知らない巫女姫は、指が生み出す淫悦を知らなかった。
だが、それが恥ずかしいことであることは分かる。秘部を覗き込んだ男たちが、ニヤニヤといやらしく笑み崩れていたからだ。
「照れずともよい。気持ちよくなっておるのだろう？　見よ、こんなにも粘っておるわ」
ぬちゅぬちゅと濡れた肉ビラに指を滑らせていた柳川が、滲む愛蜜を掬い上げて笑った。甘酸っぱく香る粘液がツウッと糸を引き、羞恥に赤らんだ肉畝を濡らす。
「匂いもきつくなってござる。見た目は幼くとも、素質はあるようでござるな」

ニヤついた幻聖の枯れ枝のような指が、まだ小さなビラビラの根本をしごき、繊細な薄膜を挟んで軽く引く。

「素質って、なに……なにを言っているの、アナタたち⁉」

「牡がいなければ生きていけぬ、淫らな牝の素質だ。ほほう、見よ幻聖。赤ん坊のように小さな穴から、泡が噴き出して来おったぞ」

嘲る声に意識が引かれ、リルフィも感じた。

弄られている粘膜花弁の狭間でヒクンヒクンと蠢いている無垢の穴に、小さな泡が膨らんではパチン、パチン、と弾けていることを。

「そ……それが、なんだっていうの⁉」

身を捩って叫んだリルフィは、己の声に混じる甘い響きに驚いた。下賤な男たちに弄り回されている秘裂には温かな感覚が蓄積し、イヤだと思う気持ちが溶けていく。

これが「感じる」ということか――ぼんやりと理解したリルフィの胸中に、激しい怒りが渦巻いた。自分でもみだりに触れないよう気を使っていた大切な場所を、こんな男たちにいいように弄られ、自分が望んでいない快感を産みつけられてしまうとは――。

しかし、歯軋りしている間にも恥ずかしい愛蜜はジュワ、ジュワ、と滲んでいた。男たちの指に蹂躙された粘膜花弁には微弱電流が湧き起こり、男を知らぬ膣穴にも波及して下腹部が熱くなってくる。

「いやはや、本当にこれが生娘の秘部か？　指がふやけてしまいそうだわい」
笑った柳川が指を引き抜き、ツウッと糸引く粘液をリルフィの尻房で拭った。
「く……ッ！」
生温かくてぬるりとした、気持ち悪い感触。
そんなモノが自分の身体から出ているのだと思うと悔しいし腹立たしいが、男たちの指にまさぐられた割れ目は甘酸っぱい蜜でグチュグチュになっていた。牝の身体に備わった恥ずかしい機序だから、どんなに必死にこらえていても勝手に滲んでしまう。弄り回された粘膜花弁は厚みを増してさらに赤らみ、滴を浮かべたその姿はまるで、朝露に濡れた緋牡丹のよう。喘ぐ花芯から愛蜜の小さな泡とともに瑞々しい牝香を立ち上らせて、健気に咲きこぼれている。
「いやしかし、惜しいのう。このように可憐な蕾を、自らの手で咲かすことができぬとは……なんとかならんか、幻聖？　そちの妖術で、処女の証を蘇らすことはできんのか？」
愛らしい肉穴を目の当たりにして、柳川の欲望が再燃したようだ。ますます強張った肉棒をリルフィの顔に頬(しぺ)りに擦りつけながら、気味の悪い声で妖術師に訊く。
「それは無理でござる――が、見ればお肉棒が限界の御様子。我慢は身の毒と申しますし、なんとかせねばなりませぬな」
苦笑混じりの幻聖の声に、リルフィはハッと顔を強張らせた。なんだかんだと言いなが

ら、やはり犯されてしまうのか。こんな連中に、純潔を穢されてしまうのか――。
ぬちゅり。
尻側から秘裂に触れていた枯れ枝のような指が引き抜かれ、会陰部に生温かなぬめりが塗り広げられた。愛蜜に濡れた指先はさらに滑り――。
「あ……あっ⁉　そこは……ああっ！」
瑞々しい尻房の狭間、紅く色づいていた尻穴に、ヌチュッと触れてきた。
汚物をひり出す排泄器官は、ある意味で秘裂よりも恥ずかしい場所だ。やめて、汚い――頬にパッと紅を散らしたリルフィは逆さに撓められた身体を揺すり、仰向いた尻を突き上げて、菊蕾に感じるぬめりから逃れようと必死に藻掻く。
「こちらの穴で御満足いただけませぬか？」
「む？　御不浄か……」
一瞬顔を蹙めた柳川だが、懸命に藻掻いているリルフィに気づくと相好を崩した。
「御不浄とはいえ、畏れ多くも畏くも、夷奴姫様の御穴ではあるな。下賤な儂には身に余る名誉、慎んでいただくとするか」
「ふ、巫山戯るな……はぅっ⁉」
くぐッ！
硬く窄んだ菊蕾に、老妖術師の指先がねじ込まれた。反射的に締めた尻穴がこじ開けら

れ、愛蜜にぬめる硬い指先がグリ、グリ、グリ――。
（あ……ああっ！　指が、指が……汚い、場所……にっ！）
秘裂とは違い、しごかれた肛膜に湧き上がるのは熱い痺れだった。節張った関節で括約筋を揉み込んだ枯れ枝のような指は、内側で鈎に曲がって直腸粘膜を探ってくる。
「この穴、遊ぶにしては少々硬うござるな。しばしお待ちを」
「くっ⁉　……あっ⁉　や、め……ろぉっ！」
伸びやかな太股を緊張させて尻穴を締めたが、もう遅い。
器用に動く指先がクニクニと芋虫のように蠢いて、肛門が内側から揉みまくられた。恥辱と汚らわしさに歯軋りするのに、
（な……なに、これ……そんな、どうしてっ⁉）
見られるだけでも恥ずかしい汚辱の穴が、小刻みに動く指先に蹂躙されて淫らな熱を帯び始めた。ただの愛撫ではない。淫悦を呼び覚ます妖術が、密かに用いられているのだ。
「ふ、く……うぅ……」
必死に拒もうとして締めた括約筋が、クニクニと揉み解されてどうしようもなく蕩けていく。汚いのに、恥ずかしいのに――と歯を喰い縛り、息を詰めてこらえても、指先から放たれた妖力が尻穴の裏側に肛悦の卵を産みつけてくる。
クニ、ムニュ、クイ――絶え間なく浴びせられた妖しい術と執拗な愛撫に、菊膜が甘く

蕩けてしまった。はしたなく弛んだ尻穴を自覚しているのに、胡座縛りに緊縛されて逆さに転がされたリルフィには、上擦った吐息をこぼして恥辱に震えることしかできない。

そして――。

「お待たせいたした。もうよろしゅうござる」

ぬぽん、と幻聖の指が引き抜かれた。つい先ほどまで硬く締まっていた肛門が、抜け出ていく指に未練がましく絡みつき、紅い肉膜を捲り返してポッカリと口を開ける。覗き込む柳川の目に映ったのは、喉奥のように濡れて緩やかに波打つ暗い穴。汚らわしいモノをひり出す器官とは思えぬほど、妖しく美しい色艶だった。

「うぅむ……穢れなき処女の身体に、これほど淫靡な穴があろうとは……」

尻穴で我慢しろと言われたときには眉を顰めた柳川だったが、ねっとりと濡れた紅い肉穴を目にして我を忘れたようだ。いそいそと立ち上がって幻聖と入れ替わり、もはや我慢できない、とばかりに強張った肉棒を巫女姫の尻穴に添える。

「うぅっ!?」

繊細な菊膜に熱い硬さを感じ、リルフィは呻いた。呻くだけでなく胡座に縛られた脚を揺らし、逆さに撓められた身体を捩って逃れようと悶える。

だが、ダメだ。

「拙僧がこちらで押さえておきまする。柳川殿は御懸念なく、ひと思いに突き通されませ」

「もとより承知」
荒縄で緊縛された身体をいやらしく笑った男たちにふたりがかりで押さえられては、逃れることなどできはしない。
「け、汚らわしい……ケダモノにも劣る所行！　森の理にもヒトの道にも外れた振る舞い、アナタたちの神も赦さないでしょう！」
必死に叫ぶ声を無視して――グリ、グリリ！
紅くむくれた亀頭が括約筋を押し退け、尻の中に潜り込んできた。
「く……あ、うぅ……ッ!?」
いやらしい指先に揉みまくられてトロトロに蕩けていたはずの肛門が、猛る牡肉にこじ開けられてミシミシと軋んだ。熱く硬く、そして太い。肉塊を感じた直腸が排泄反射を起こして波打つが、欲望を溜めて石のように強張った淫棒は容赦もなく、ぬめる肉膜を掻き分けて奥へ、奥へ――。
「い、や……やめて、やめなさいっ！」
グイ、グイ、と押し入ってくる男根を拒み、上擦った声で叫んだが、
「よいのう、よいのう。そそる声じゃ。そら鳴け、もっと鳴け！」
仰向いた美尻に腰を乗せるようにした柳川を悦ばせただけだった。
その間に――グ、グ、グプン！

猛々しく張り出した亀頭のエラが肉の関所を乗り越えて、尖端の膨らみが完全に、尻の中へ埋もれた。色を失うほどに伸びきっていた菊膜がカリ首のくびれに一息ついたが、もちろんそれで済むわけがない。

（あ、ああ……入って、くる……私の中に、男が……ああっ！）

生温かくぬめる巫女姫の粘膜に触れた剛直は、いきり立つ肉クサビをさらに滾らせ、勢いを増して突き込まれた。

ズン、ズン、ズズンッ！

火傷しそうに熱くどっしりとした存在感が、腹の中に膨れあがる。

「はぅ……く、うぅぅ……！」

燻る焼け木杭をねじ込まれ、グリ、グリ、と抉られているような――肉の虚ろを埋め尽くしたソレはあまりにも大きく、太く長くて、無視することなどできない。

「おお、なんという熱さ……なんという心地よさ！　ヌルヌルして柔らかな姫の肉膜が、儂の肉棒に絡みついてきよるわ！」

嬉しそうに吼える柳川の声が、剛直を伝って腹の中に響いた。

肉穴を埋め尽くした淫棒は流れ込む血潮に打たれてドクン、ドクン、とおぞましく波打ち、胎内にあるソレが汚らわしい男根であることを声高に主張している。

犯された――純潔の証はまだ無事だが、そんなことは問題ではない。

浅ましく下劣な男に穢れの肉穴を貫かれ、身体のもっとも深い場所でひとつに繋がってしまった――その事実に打ちのめされ、心がひび割れてしまう。
（わ、私、いま、男と繋がって、い……る……！）
折り曲げられた胸でサラシに守られた乳房が火照り、噴き出す汗にぬめり始めた。怒りと羞恥の汗だ。しかし歯を喰い縛って尻穴を締めれば、深々とねじ込まれたおぞましい肉棒をよりハッキリと感じてしまう。
「いかがでござるか、柳川殿。姫様の御不浄では、やはり御満足いただけませぬか？」
「いや、よい。これでよい」
悦びの棒を熱いぬめりに包まれた柳川が、満面に喜色を浮かべて唸った。
「この柔らかさ、この温かさ、この濡れ具合――とても不浄の穴とは思えぬ心地よさじゃ。天鵞絨（ビロード）のように滑らかな肉膜が、ユルユルと波打っているのもよい」
うっとりと目を細めた男は手を広げ、リルフィの胡座に緊縛された脚に手をかける。
「うっ⁉　あ、あぁっ⁉」
グププッ！
根本まで深々とねじ込まれた淫棒が、力強く引き戻された。腹の中に激震が響き、震える桃尻の真ン中に紅く咲きこぼれるのは腸液にぬめり光る肉の華。
そのまま一気に引き抜かれるかと思いきや、カリ首まではみ出しかけた肉棒がやおら力

の向きを変え――グポポッ！　と再び奥底まで押し戻された。リルフィの尻にのしかかった柳川が、上下に動き始めたのだ。

「く、う、うぅ……ッ！」

焼け木杭のように熱くて硬い男根に腹の中を掻き回されて、リルフィの口から嗚咽がこぼれた。悔しい、悔しい――懸命に噛み締める歯の隙間から息が漏れる。撓められた身体が鞴のように働いて、溢れ出す声が止められない。

さらに――ブジュ、ブジュジュ。

仰向いた秘裂の奥に、淫らな音が立ち始めた。直腸を蹂躙する肉棒が処女膣穴を圧し潰し、内側に溜まっていた愛蜜が絞り出されてしまうのだ。

「お？　見よ、幻聖！　夷奴姫様が、尻穴を犯されて涎を垂らし始めたぞ！」

「ち……違うッ！」

カァッと頬を赤らめて叫ぶリルフィの顔に、ポタリ、ポタリ――肉畝を乗り越えて垂れ始めた恥ずかしい粘液が、甘酸っぱい匂いを振り撒きながら滴った。

（こ、これは……!?）

自らの匂いのあまりの濃さに、咽せそうになる。

頭の芯が痺れるような、熟しきった果実のような、芳醇な牝香。

「なんと淫らな匂いじゃ。尻穴を犯されて、早くもよがっておるのか？」

「こちらの穴にもねじ込んでくれ、と牡を誘っているのでござろう」
「ば、バカを、言うな……くぅっ⁉　あっ、うぅ、ああっ⁉」
睨み上げたリルフィの口から、上擦った声が溢れ出た。
秘裂の端、紅くぷっくり膨れた肉豆が、幻聖の指に弄られたのだ。表面を軽く撫でられただけなのに、凄まじい電流がビリビリ走る。稲光のような衝撃が逆さになった身体を駆け下り、頭の中が真っ白になる。
（よ……妖術かっ！）
気づいても、どうしようもない。
莢から掻き出された肉豆がビンビンとして、逆さになった身体がいやらしい指先に操られているように鋭く捻れてしまう。
「おおっ⁉　し、締まる……ッ！」
「これは失敬。しかし、姫様に肉の悦びを御教授するのが第一の目的。柳川殿には、しばし御辛抱していただかなければなりませぬ」
「な、なにが辛抱なものか。いまのはよい、もっとやれ！」
「やめ、やめ……ぁあっ！」
ビクンッ！　ビククンッ！
恥ずかしいのに、悔しいのに、跳ねる身体が止められない。

真っ赤に膨れた肉豆は、女体の中でもっとも敏感な場所。
そこに直接、妖しげな術をかけられているのだ。
軽く触れられただけで秘裂から脳天へ鮮やかな閃光が走り抜け、背筋がキュウッと捩れてしまう。圧し潰されてクルクルと捏ね回されれば仰向いた腰が天を突くように跳ね、先から根本へ小刻みにしごき降ろされれば男根を咥えた肛門が鋭く窄まる。
汗に濡れたサラシが小振りな美乳を揉みまくり、乳首がクニクニ折り曲げられた。撓んだ上衣の襟が柳川の動きに合わせてはためいて、白布に守られている美乳の側面がペチンペチンと叩かれる。
「おおッ！　夷奴姫の尻穴に、しゃ、しゃぶられ、おるぅうっ！」
気持ちよさそうに唸った柳川が、鼻息を荒げて腰の律動を強めた。
グポキュ、グポキュ、グポキュ――男根に馴染んだ肛門が、淫水のような腸液を噴きこぼして淫らな音を立てる。裏側から揉み潰された膣洞からも細かく泡立った愛液が噴き出し、肉畝を乗り越えて腹に垂れる。
（か、感じない！　感じて、なる、ものか……ッ！）
自らに言い聞かせたリルフィが必死に歯を喰い縛っても、抑えられるはずがない。淫核に生じた悦びはあどけない粘膜花弁に染み広がり、わずかに残っていた可憐さを淫らな色に染め上げた。肉豆の根本から尿道を伝い、膣洞や子宮にまで熱い波紋が行き渡る。

「ふ、うぅ……く、うぅ……」
こらえるリルフィの声が上擦り、歪む眉根に艶めかしい色が閃き始めた。
（感じてはダメ、ダメ……ダメ、なの……にぃっ！）
グポングポンと犯されている尻穴が気持ちいい。
幻聖の指に弄られている肉豆から男を知らぬ膣孔へ、いやらしい妖力が流れ込んでいるらしい。処女膣膜に浸透した妖しい術が排泄器官にまで染み渡り、牡肉の硬さ熱さを悦ぶ淫らな穴に作り替えられていく。
「お？　ヌルヌルが増してきおった。儂の珍宝に慣れてきたな」
「ち……ちが、うぅっ！」
「ふはは、恥ずかしがっておるわ、初々しいのう。それ、褒美じゃっ！」
「ひっ⁉　あ、うぅっ！　う、う、動かない、でぇえっ！」
猛々しい肉棒に腹の中を掻き回され、逆さに撓められた身体に肛悦が満ちた。暴れる男根の鋼のような硬さ、燃えるような熱さに、身体だけでなく心が寄り添っていく。純潔の証を残したままの膣穴も、肉膜の裏側でグポリ、グポリ、と動く淫棒を欲し、処女らしからぬ濃密な愛液を滲ませて焼けつくほどに焦れている。
（な、なに、これ……身体が、浮く……浮いてしま、うぅ……⁉）
苦悶に歪んでいた顔が、恍惚に弛み始めた。喘ぐ唇に滴るのは、甘酸っぱく香る瑞々し

い愛蜜。次々と押し寄せる肛悦の波と自らの淫華が放つ艶めかしい芳香に、意識が蕩けてグイグイ押し上げられていく。
「ふぅ、はあ、うぅ……ああ、ああ、ああっ⁉」
身体は逆さに撓められているのに、心は高みへ登り始めた。
もちろん、自慰すら知らない巫女姫には、生まれて初めての感覚だ。
「い、いぃやぁあっ！　やめて、イヤッ！　ダメェエエッ！　おかしくなる、おかしくなっちゃ、ああ、ああ、あぁぅう――――ッ！」
どこかへ弾き飛ばされてしまいそうな恐怖に怯え、上擦った声で叫んだとき。
尻穴を蹂躙していた男根がいきなり動きを止め、小刻みに震え――ビュクッ！
ビュククッ！　ドピュピュッ‼
リルフィの直腸に沸騰した粘液を迸らせた。
（な……なに⁉）
白く蕩けていた脳裏に、本能的な嫌悪が閃く。
びゅくり、びゅくり、と脈打ちながら注がれる熱さが腹に広がり、全身に満ちていた陶酔感が潮のように退いていく。
いま、私は、穢された――浅ましくて下劣な男に、穢されてしまった――心が震え、ひび割れる。冷たく重い絶望が背に広がり、目の前が真っ暗になる。

「ふぅぅ……なかなかよかったぞ。そちも試すか？」
スッキリとした顔で笑った柳川が、リルフィの太股を押し、尻穴に深々と潜り込んだ肉棒を引き抜き始めた。
――ぐ、ぐぐ……ぬぽちゅ。
茹だったように紅い男根を吐き出した肛門が、ぬめり光る肉膜を広げて捲れ返る。太さに慣れた肉穴は窄まることを忘れたように赤暗い奥を覗かせ――胡座に縛られたリルフィの身体が倒れると、青臭く香る白濁液がトロリトロリと溢れ出してきた。
「いえ、夷奴姫様はお疲れの御様子。今日はここまでといたしましょう。それより……」
「なんじゃ幻聖？　夷奴族を討つ妙案でも思いついたか？」
声を低めた幻聖が背を向けて歩き出すと、衣服の乱れを整えていた柳川があとに続いた。尻穴から精液を垂らして呆然とした巫女姫のことなど、忘れてしまったようだ。
リルフィも、男たちを叱る余裕はない。
（穢され、た……私、穢れて、しまった……）
飽きられた玩具のようにうち捨てられたリルフィは、胡座縛りに緊縛されたまま、ただそのことだけをぼんやりと思い続けた――。

『第七章　狼閨』より

（イヤ、イヤ……獣はイヤ……なのに……どうして、どうして⁉）

乙女の心は悲鳴をあげているのに胸はドキドキ高鳴り始めた。淫らに熟してしまった女体には、獣もヒトも関係ないのだ。腰に絡みついた太い前脚の力強さが頼もしく、耳朶をくすぐる鼻息の熱さに牡の昂奮を感じて身体が震えてしまう。

ぐぶちゅ、ぐちゅちゅっ！

繊細なビラビラが掻き分けられ、膣前庭が激しくしごかれた。抱え込まれた尻を揺らして逃れようとしたのに、腰に絡みついた前脚はビクともせず、細く尖った切っ先は処女膣孔に容赦なく潜り込んでくる。

「ふは……ッ！」

若者の指に触れられたときと同じような電撃が、膣洞を貫いて子宮を打った。

だがそれは、一瞬だけ。

力強く前後する淫棒はすぐに太さを増し、ギチ、ミチ、ギチ――抉られた膣穴が引き裂けそうに軋んだ。初めて受け入れるモノとしては、獣の男根は太すぎ、硬すぎるのだ。

「く、ひ、うぅぅ……太い、太いぃいっ！　ダメ、ムンテ、ダメダメダメぇえぇ……入らない、入らないってばぁぁあっ！」

まだ尖端しか潜り込んでいないのに、壺口の粘膜は伸びきってしまった。こじ開けられた括約筋が軋む。これ以上は無理だ、壊れてしまう――若い牝の身体を灼き焦がしていた

淫欲が、膨れあがる激痛の予感に吹き飛ばされた。迸る悲鳴が裏返って波打ち、涙に濡れた頬が苦悶に歪む。逃れようとした腰が太い前脚に引き戻され、

ベチョ、ベチョッ！

泣き叫ぶ巫女姫の頬に、生臭い舌が貼りついてきた。リルフィを牝狼だと思い込んでいる銀狼が、機嫌を取ろうとしているのだ。

「うぅっ！」

粘つく唾液を嫌って顔を背けても、長い鼻がすぐに回され、反対側の頬を舐められた。頭を下げて両手で顔を覆えば、鋼の首輪をかけられたうなじが鋭い牙に甘噛みされる。

怖い。

それ以上に痛い。

ズン、ズン、ズズンッ！

真っ赤に燃える円錐状の切っ先に膣粘膜がこじ開けられ、太さに震える膣膜が力任せに押し退けられて――グチッ！　グジジッ！

「ひっ⁉　ひ、ぎぃぃいいっ⁉」

鋼のように硬い淫棒に、純潔の証が磨り潰された。狭い肉穴に鮮烈な激痛が炸裂し、四つん這いになった背筋がビクビク捻れて、真っ赤に染まった顔が跳ね上がる。

破れた処女膜をグリリッと抉り、熱い肉棹がさらに奥へ、奥へ。尾を引く破瓜の痛みに

身体中が痺れ、尻を突き上げた姿勢のままビクッ！　ビクッ！　と痙攣する。
（あ、あぁぁぁ……入ってくる、入って、く、るぅぅ……私の中に、ムンテのオチンチンが、こ、こんなに、深、くぅぅ……！）
煮え滾った肉塊に、膣粘膜が押し退けられる。たくましい弾力が腹の中に膨れあがり、ぎこちなく顫動するヒダヒダがゴツゴツした硬さに揉み込まれた。
モコ、モコ――なだらかに起伏する恥丘に、内側で動く男根の形が浮き上がった。真っ赤な剛直にこじ開けられて限界まで引き伸ばされた壺口からは、噴き出す愛蜜に混じって鮮やかに紅い破瓜の血が細い筋をなして流れ出てくる。
ズン、ズン――ズズンッ!!
「きぁひぃ――ッ！」
一際強烈な衝撃が腹の奥底に爆発し、顔を跳ね上げたリルフィの唇から掠れた吐息が漏れた。沸騰した血潮を溜めて硬く怒張した切っ先に、子宮口を突かれたのだ。
（お、奥に、当たって、るぅ……ムンテのオチンチンが、お腹の底に……）
ドクン、ドクン、ドクン。
力強く拍動する肉の塊を、胎内に感じる。
「ふ、ぁあ……く、うぅぅ……」
荒い呼吸を繰り返し、突き刺さるような痛みをやり過ごしていると、淫棒の形を意識す

るくらいの余裕が生まれた。狭かった膣洞が硬い男根に圧し伸ばされて、厳めしい形状に馴染んできたのか。

（ああ……私、繋がって、い、る……ムンテと、こんなに……深、く……）

生臭い粘液に濡れた獣の男根が、身体の一番深いところまで潜り込んでいる――のに、四つん這いになった女体に満ち始めたのは嫌悪ではなく、喩えようもない充足感。膣孔にくすぶっていたもどかしい想いが、待ち焦がれていた牡肉に触れて溶けていく。耳朶を濡らす唾液の温かさが気持ちよくなり、頬をくすぐる鼻息が芳しく感じられる。

獣に犯された女体が、獣に成り下がろうとしているのか。

（ち、がう……私は、巫女姫よ……夷奴族を率いる、巫女姫なのよ……）

背にのしかかっている狼に馴染んでいく自分を、リルフィは懸命に否定した。身を引き裂かれるような激痛は薄れ、男根に密着した膣粘膜が温かくなりつつあるが、それを悦んではならない。

（私は、ヒト……ヒト、なんだから……狼じゃない、獣なんかじゃ、ない、のよ……）

震える心に言い聞かせ、身体を侵蝕する肉の悦びを懸命に拒んでいると。

「う……ンっ⁉　な、なに……あ、ああっ⁉」

ググポッ！

背にのしかかった狼が、力強く腰を退いた。紅い淫棒に絡みついていた膣孔が捲り返さ

れ、鮮烈な稲光が脳天を突き抜けていく。
「く、あ……あぁううっ⁉」
その余韻を味わう間もなく、力の向きが反転した。
槍の穂先のように尖った男根が肉悦に蕩けかけていた膣膜をこじ開け、蜜を溜めたヒダヒダを激しく磨り潰しながら再び奥へ――グジュンッ！
「やぅ、あぁ、あヒぁあっ！　だ、ダメ、ムンテ、やぁ、ダメぇえっ！」
太さに慣れたといっても、処女を散らしたばかりだ。獣の腰遣いはあまりにも荒々しくて、太い前脚に抱え込まれた身体がガクンガクンと揺れる。腕の間に実ったたわわな乳果が香汗の滴を飛ばして激しく踊り、桜色に染まった乳谷が火照った柔肉を揉み合って、双球に甘い感覚が充満する。
剛直に掻き回された膣穴に、痛みはない。
代わりにパチパチ弾けているのは、小さな快感の火花。
甘蜜を滲ませてぷっくり膨れた細かな膣襞が、激しく抽迭される獣の男根に磨り潰され、熱い塊に捲り返されて、鋭い肉悦を産みつけられているのだ。
（うぅ……く？　な、なに……これ⁉　お、お腹が、燃え……るぅうっ！）
次々と炸裂する火花が寄り集まって、大きな熱い波となっていく。
つい先ほどまで生娘だったリルフィには、もちろん生まれて初めての感覚だ。

ズズン、ズズン、と抉られた膣穴から脳天に向けて、煮え滾った津波が走り抜ける。狼にしがみつかれた身体が逃げるように捻れて、

「ふぁ、くぅぅ、ぁああ……！」

震える喉から迸る媚声に甘い響きが混じり始める。

グポポ、グポポ、グポポッ！

次第に昂る牝の鳴き声に応えるように、狼の腰の動きが力強さを増した。男を知ったばかりの膣膜が前後する淫棒に力強く磨り潰され、出入りする淫茎に壺口の粘膜が捲れ返り、硬い亀頭に突きまくられた子宮には衝撃が反響する。

生娘の未熟な膣に、狼の男根はあまりにも熱く、硬くて、

「ダメ、ダメダメ、ダメだったらぁ、ムンテぇえっ！　そ、そんな、激しく、され、た、らぁああっ！　壊れちゃう、壊れちゃう、壊れちゃ、あぁ、ああ、あああっ!!」

リルフィは裏返った悲鳴をあげた。

「ガゥウッ！」

その耳元で、狼が低く唸る。清冽な神気はもはや微塵も感じられず、ただただ恐ろしいだけ。鋭い牙の間から生臭い涎が氷柱のように垂れ落ちて、鋼鉄の首輪を巻かれたうなじを濡らし、艶やかな黒髪にべっちょりと粘り着く。

「ふひっ!?　ひぁ……ぅぅっくぅぅ……ッ!?」

これは、こんなのは、神ではない。
肉欲に猛っただの獣、己の欲望を御せずに暴れている浅ましい牡――。
一瞬閃いた嫌悪は、しかしすぐに消えてしまった。腰に絡みついた前脚にグッと力がこもって尻が引かれ、奥深くまでねじ込まれた淫棒が小刻みに前後し始めたのだ。
「お、奥が、奥に、奥がぁあっ！　ああ、ああ、あああっ⁉」
切っ先を押しつけられた子宮口に激震が響き、突き揺すられた子室に熱いモノが爆発した。瞼の裏には真っ白な光が閃き、意識が切り刻まれて、まるで膣奥を貫いた肉棒に頭の中を掻き混ぜられているような――。
（な……なに、コレ⁉　なんで、こんな……ああ、ああッ！）
痛いはずなのに、怖いはずなのに――たくましい牡肉に磨り潰された膣膜が心地よく痺れ、捲り返された壺口には鋭い感覚が炸裂した。太い硬さにグポングポンと揉まれた括約筋が、どうしようもなく蕩けていく。
生まれて初めて牡を体験した生娘には、鮮烈すぎる肉悦だ。
「ダメ、らめ、らぇえっ！　おかしくなりゅ、おかしくなっりゃ、うぅぅ――ッ！」
叫ぶリルフィの身体の下でビタンビタンビタン、と湿った音を立てているのは、腕の間で跳ね踊る桜色の美乳。汗ばんだ乳谷が激しく擦れ合い、重みに捻れて乳奥まで揉みくちゃにされた双球に淫熱が溜まって、湧き上がる悦びに意識や理性が蒸発していく。

「む、胸が、胸がぁあ……ふぁひっ⁉　ふぁ、ふぁああっ⁉」
膣孔を突きまくられた身体が前後に揺れて腕が曲がり、巨乳が胸の下で潰れて激しく揉みまくられた。上衣の前身頃を突き破らんばかりに勃起していた乳首が冷たい岩に圧されて乳肉にめり込み、コリコリした硬さで乳暈の裏側を責める。
（こ、こんなことが、気持ちイイ……だなんて……！）
胸の悦びに頬を赤らめ、火照る身体をくねらせてよがり悶えていると、
グポポ、グジュポ、ジュポポッ！
狼の動きが速くなり、男を知ったばかりの壺口が荒々しくしごかれた。ぎこちなく蠕動していた幼い膣襞が力任せに磨り潰され、猛る肉塊に蹂躙される。真っ赤に灼けた鉄の棒で、腹の中を滅茶苦茶に掻き回されているような――ねっとりした粘液に濡れてヌラヌラと紅い獣の肉棒には、軟骨の芯が通っているのだ。
「ひぃ、はひぃ、あひぃぃぃっ‼」
背を駆け抜ける衝撃に、リルフィの意識が途切れ始めた。
ズン！　ズン！　と膣奥を突かれるたび、走り抜ける悦びの津波に頭の中を掻き回され、胸の下で潰れた乳房が燃えるように熱くなる。
「ガフッ！　ガフゥッ‼」
紅い舌をダラリと伸ばした銀狼が、柳腰に絡みつけた前脚に力を込めた。鋭い鈎爪が筒

袴を引き裂き、唾液に濡れた牙が細い肩を噛む。
（痛……く、ない？　き、気持ち、イィ!?）
肉棒に突きまくられている秘部だけでなく、噛まれた肩や掻かれた太股にも快感が閃いた。猛る男根に掻き回されている肉壺だけでなく四つん這いになった身体までもが、狼に馴染みつつあるのだ。
「やぅ、ぁあ……お、おかしくな、っちゃ、ぁあ、うぅぅ……ッ！」
千々に乱れる心に合わせて伸びやかな肢体も淫らに悶え、振り乱された黒髪の先から甘酸っぱく香る汗の珠が飛ぶ。
なにがどうなっているのか、もう分からない。
いまどこにいて、ナニに、どのような格好で犯されているのかも、まったく分からない。
ただひとつ分かっているのは、どうしようもなく気持ちイイということ。
「ああ、あぅ、あぁあ……ッ！」
身体の芯を突き抜ける衝撃に甘い吐息が溢れ出し、ぷっくり膨れた唇から涎とともにこぼれ出た。薄暗い洞窟に嫋々（じょうじょう）と響くその声は、長く尾を引き悩ましく波打ち、まるで悦びに鳴く牝猫のよう。
乱れた上衣がずり落ちて、細い肩が露わになった。鋼の首輪の下でたおやかなうなじがほんのりと赤らみ、滑らかな背の柔肌にはふつふつと真珠のような汗の珠が浮く。

恍惚に染まった眉根の下、涙に濡れた目元が弛み、赤らんだ頬に法悦の涙が垂れ落ちる。
喘ぐ朱唇に浮かぶのは、妖艶に綻んだ淫女の笑み。
（と、飛んで、るぅ……登ってる、空へ、空へ……あぁあっ！）
薄暗い洞窟の奥にいて、硬い地面を掻きむしりつつ尻を高く突き上げて、リルフィは遙かな虚空へ駆け登っていく。
ズンッ！　ズンッ！　ズンッ！
膣奥を突く獣の肉棒が、強さと激しさを増した。
「めぁひっ⁉　ぁえ、ぇあ、あえぇえっ⁉」
脳裏に弾ける閃光が間隔を狭め、意識が白く灼き尽くされて――。
「はひ、はひ、はひぃいっっ！　飛ぶ、飛ぶ飛ぶ、飛んじゃ、ぁあ、ああ、ぁあああぁあああッヒぃいいぃいい――――ッ！」
ビクンッ！　ビククンッ⁉
狼にしがみつかれた身体が鋭く跳ねて、犯された肉穴がギュウッと窄まった。
腰に絡みついた太い前脚にグッと力がこもり、膣穴の中で獣の肉棒が硬さと熱さを増し、小刻みに震えて――ビュクッ！
ビュククッ！　ドプッ！　ドプッ！　ドプッ！
「あ、あああ、熱、ぃいいいイィィッ⁉」

硬い切っ先に突きまくられて感度を高められていた膣奥が、煮え滾った精液に叩かれた。絶頂に達していた意識が脈打つ奔流に急き立てられ、さらなる高みへ押し上げられる。

跳ね上がった顔は悦びに蕩け、喘ぐ唇から涎が垂れた。

潤んだ瞳は焦点を失い、もはやなにも映っていない。

（蕩け、ちゃった……身体も、心も……もう、蕩け……ちゃった……）

煮え滾った荒波に揉みまくられていた全身が、指一本すら動かせないほど気持ちいい。ビュクリ、ビュクリ、と注ぎ込まれる精液が細い肉管を遡って子宮に満ちているように、下腹が熱く煮えている。

なるほど、これか――これが、牝になる、ということか……。

長く苦しかった禁欲の日々から解放されたリルフィは、満足の溜息を漏らした。

あれほど悩ましかった膣奥の疼きは嘘のように消え、あとに残っているのはうっとりするような充足感だけ――と。

「う……あ？　くぅっ⁉」

ミチ、ミチチ……メキキッ！

射精を終えたはずの男根の根本が、不意に熱さと硬さを増した。赤い血を滲ませた処女膜の残骸がムクムクと膨れる肉塊に圧し潰され、忘れかけていた激痛が股間に走る。

「な、なにっ⁉　ムンテ、なにっ⁉　だ、ダメ……ダメダメ、抜いて、抜いてぇええ！」

絶頂の頂から引きずり降ろされたリルフィは洞窟の床を掻きむしって身を捩った。
しかし、大きく膨らんだ淫棒のつけ根が肉のカエシとなって壺口の裏側に引っかかり、抜け出ていく気配はまったくない。
狼の眷属に特有の、二次射精が始まるのだ。
「ガフ、ガフッ！」
紅い舌をダラリと伸ばしたムンテが、肉棒を突き刺したままリルフィの横へ降りた。
「ふっ⁉　ぎ、ひぃいっ⁉」
ギチギチと軋んでいる膣穴の中で巨大な肉の塊が精液のぬめりに乗って回転し――尻と尻を突き合わせた、独特の体位になる。
「き、ふ、うぅ……⁉　さ、裂ける、裂けちゃ……うぅう……ッ！」
拳のような肉瘤に膣全体が掻き出されてしまいそうだ。内側から圧された膣穴が粘膜花弁を押し退けて、肉畝の外まではみ出している。つい先ほどまで己の指すら知らなかった括約筋は限界以上に伸びきって、ピククン、ピククン、と痙攣している。
痛い、苦しい――しかし、
（き、もち……イイ……？）
あまりの太さに股間が壊れてしまいそうだが、決してイヤな感覚ではなかった。
膣穴を埋め尽くしている剛直はいまだに硬いし、たくましく太いし、なにより熱い。

そして――。

「ン……あ⁉　ああ、ああ……おち、んちんが……う、うご……くぅ⁉」

膣穴を埋め尽くした太い淫棒が、ズズン、ズズン、と蠕動し始めた。背を丸めた狼が腹の筋肉を締めて、精巣に溜まった精液を絞り出しているのだ。淫棒を伝ってリルフィの胎内に響いているのは腹膜筋の単調な余波に過ぎないが、尿道を駆け抜ける溶岩が硬い肉棹を小刻みに震わせ、ほかの生き物ではあり得ない不思議な旋律を奏でている。

（あ、ああ、熱いぃぃ……熱いのが、どんどん、どんどん……注がれ、るぅ……！）

子宮口に密着した筒先からドプリ、ドプリ、と噴き出た大量の精液が、蠕動する淫棒に攪拌され、縮緬のように細かな肉襞のひとつひとつにしっかりと擦り込まれる。

（ヌルヌルが、お腹の中に……塗り広げられて、いる……ムンテの精液が、太いオチンチンに掻き回されて、グチュ、グチュ、してるぅぅッ！）

熱いぬめりを擦り込まれ、脈動する淫棒に愛撫されて、伸びきった膣膜の痛みが蕩けていく。苦悶に歪んでいたリルフィの眉根がふわっと開き、恍惚の朱鷺色に染まる。

先ほどのような激しさはないが、胎内に充満する精液のねっとりした熱さがどうしようもなく心地よい。芯を駆け抜ける精液に内側から突き揺すられた淫棒は膣穴の中で小刻みに震え、芋虫のように伸縮して、肉悦を知った膣襞をグチュ、グチュ、と力強く磨り潰す。

蠢く淫棒が腹の底に産みつけるのは、寄せては返す悦びの波。

朦朧とした頭の中に残るのは、牝の本能。
（いっぱい、いっぱい……赤ちゃんの素が、私の中に、こんなに……たく、さん……）
たくましい牡と結ばれたい、愛する牡の仔を産みたい――牝としての原始的な欲求が胎内に充満する溶岩を悦び、赤らんだ目元がうっとりと弛む。
グブ、グブ……ブジュジュ。
肉畝を押し退けてはみ出した壺口から、濃密に香る白濁液が溢れ出してきた。淫らに咲きこぼれた粘膜花弁を乗り越えて太股を伝い、あるいは淫核の先から糸引く珠となって、リルフィの膝の間にポタリ、ポタリ、と滴り落ちる。
入り口へ逃れられなかった大量の精液は、細い肉管を遡って子宮へと流れ込んだ。清らかでなければならない巫女姫の子室をねっとりと汚し、充満する。
ヘソの裏側が熱い。煮えているようだ。
「あ、へ……ぇあ……あはぁ……」
喘いでいた口元が淫らに弛み、赤らんだ頬に法悦の涙がこぼれ落ちる。妖しく笑う唇には鼻水が垂れ、髪の生え際や耳裏にフツフツと真珠のような汗の珠が噴き出してきた。
（イィ……イィ……おちんちん……イィィ……）
どこかへ弾き飛ばされてしまうような絶頂ではなく、生温かくて心地よい肉悦の泥沼へゆっくりと呑み込まれていくような陶酔感。

淫悦に張った乳房が上衣の裏地に擦れて、しっとり汗ばんだ乳肌が甘く痺れた。部族紋様に飾られた襟に勃起乳首の側面をしごかれると弾ける快美にギュウッと窄まる。

「オ、オォオッ！」

尻のうしろで狼が唸り、膣穴に埋もれた淫棒が少しずつ動きを強めた。

グジュポ、グジュポ、グクポ――熱い精液で満たされた肉壺が小刻みに前後する男根に掻き回され、青臭く香る白濁液とともに卑猥な音を噴きこぼす。

「はぅ、ぁあ、ンぁあぉ、おぉお……ッ！」

獣のように吼えたリルフィも、突き合わせた尻をゆっくりと回し、犯された肉穴を懸命に締めて、たくましい牡を悦ばせようとした。

嫌悪はもはや、欠片も残っていない。

うなじに巻きつけられた鋼の首輪も、両腕の間で痛いほどに張っている育ちすぎた乳房も、狼の尾にくすぐられてソワソワしている尻穴も、犬のように四つん這いになっていることも――肉悦に溺れたリルフィにはもう、どうでもよいことだった。

（もっと、もっと……もっと出して、熱いのいっぱい、私の中に……出してぇえっ！）

牝の本能に命じられるまま尻を振り立て、黒髪を揺らし、四肢を踏ん張って肉穴を窄めて、美しく淫らな獣に堕ちていく――と。

ダァンッ！

『第八章　獣の宴』より

ヒトほどもある大柄な猿が真っ赤に膨れた己の肉棒を握り締め、汗の粒を浮かせた滑らかな額や法悦の涙に濡れた頬に――ぬちょっ！　ねちゅっ！

「やぅっ⁉　ンっ！　ンぷ……ッ⁉」

わずかに残っていた正気が「おぞましい」と叫び、反射的に顔を背けるリルフィ。

しかし、獣の淫棒をねっとりと包み込んだ粘液のぬめりは肉悦に火照った柔肌に気持ちよかった。どうして、と一瞬思ったものの、たくましい淫茎に頬を揉まれるとすぐに微笑みが浮き上がり、鼻腔をくすぐる精臭に頭がボウッとしてしまう。茸の笠に似た亀頭を眉間に擦りつけられ、ギュッと瞑った瞼に先走り汁を塗りつけられれば、薔薇の花びらのような唇が綻んで甘い吐息がこぼれ出す。

双穴で弾けている強烈な悦びが沸騰した血潮に乗って全身に行き渡り、あらゆる場所が性感帯になってしまったようだ。イヤだ、と思いきることができない。気持ち悪さを感じない。コリコリとした硬さに唾が湧き、わななく唇がそわそわする。

「どうした、牝？　お前の好きな肉棒じゃぞ」

不明瞭だった猿の声が、ヒトの言葉のようにハッキリ聞こえてきた。

それだけ獣に近づいたということだが、それを理解する知性も、恥じる理性も、喘ぎ悶えるリルフィの中には残っていない。

「ヒトの牝は、コレをしゃぶるのであろう？　遠慮は要らぬ。好きなだけしゃぶれ」

「ンぷっ！　ぷぁ、う……ンめもっ⁉」
わななく唇をこじ開けて、猛った淫棒がねじ込まれた。
舌に感じる熱さ硬さ、味蕾に広がる牡肉の生臭い香味。
（あ……あはぁ……おいし、いぃぃ……！）
ただの柔肌でさえ感じてしまうのだから、口唇の粘膜はそれ以上だ。唇を掻き分けて斜めに突き進む淫茎のコリコリした硬さにうっとりと目を細め、頬を内側から突く亀頭のたくましさに胸が高鳴った。
猿のソレは人間のモノより小さいが、細長くて緩く捻れ、カリ首はきつく括れて尖端の肉瘤が際立っている。牡の味を求める舌が思うより先にくねって淫茎に絡みつき、立てた舌の縁でエラの裏側をしごいた。だれに教えられたわけでもない。ただ、味の濃い場所を捜して夢中で舐めているだけだ。
「おほっ⁉　こ、これは……っ⁉」
予想外の快感に驚いた猿が、慌てたように身を退いた。
ぬちゅぽっ！
抜け出ていく淫茎に未練がましく絡みついていた唇が卑猥な音を立て、愛蜜のようにねっとりとした唾液が掻き出されて弛んだ頬を濡らす。
「や、やぁ……抜いちゃ、いやぁあ……しゃぶらせちぇ、しゃぶらせちぇぇぇッ！　オチ

ンチン、美味しいのぉお、もっちょ、もっちょぉぉ！」
口唇でも感じることを知ったリルフィは、快感に蕩けて縺れる舌を懸命に動かし、鼻にかかった甘声で鳴いた。羞恥はもはや欠片もない。
（らって、らってらって……美味しいんらもん……！）
舌だけでなく頭も蕩けて、牝の欲望を剥き出しにする。
グブチュ、グビュ、ヌチュボ――卑猥な音を立てる双穴から牝香を含んだ粘液が、小さな滴となって噴きこぼれた。歪む乳房の谷間には甘酸っぱい汗がフツフツと浮き、周囲の空気を淫ら色に染め上げていく。
いやらしい香りを放つのは、愛液や香汗だけではない。
頬を濡らす涙も、喘ぐ唇を乗り越えた涎も、トロリと垂れる鼻水も――リルフィの身体から絞り出された体液はすべて、芳醇な香りを漂わせて牡たちを誘う。
「なんだお前たち、もういいのか？　では儂が……ふぉっ!?」
ニヤニヤした猿が突き出した淫棒に、リルフィがむしゃぶりついた。
むちゅっ！　ちゅちゅぢゅぢゅうっ!!
真っ赤な牡肉を濡らす生臭い粘液を音が立つほど強く吸うが、足りない。
（もっと……もっともっと、オチンチン、もっとぉおおっ！）
細胞のひとつひとつが欲情し、たくましい肉塊を渇望していた。もっと強く犯して欲し

い、熱くて硬い男根で身体中を揉みくちゃにして欲しい――虎の脚を掴んでいた両手が淫欲に操られて左右に泳ぎ、新しい男根を求めてゆるゆるとくねる。

「なんといやらしい牝だ。穴だけでは足りぬのか」

鼻を鳴らした猪が巫女姫の細腕を跨ぎ、仰向いた掌に己の肉棒を擦りつけた。

「ぷぁ、あは……おふぃんふぃん、らぁ……！」

猿の男根を咥えたまま笑ったリルフィは、細指を曲げ、触手のように細長い猪の肉棒を握り締める。太くはないが十分に硬く、しなやかな弾力に満ちた独特の感触。指先に力を込めてシュッシュッとしごくと、尖端の螺旋が親指に絡みつき、掌に感じる心地よいぬめりが粘り気を増す。

「な、なんと巧みな……しかもスベスベとして柔らかく、じっとり汗ばんで熱い。まるでオマ〇コのようだ！　こ、これが、ヒトの牝の手指か！」

「口もよいぞ！　器用な舌が、おほっ！　我が陽根の裏側をコチョコチョしよるっ！」

獣たちが交わす下劣な言葉を耳にして、リルフィは嬉しくなった。

（私の身体で、悦んでくれる……オチンチンがどんどん、硬くなって、くる……！）

青筋を立ててむくれた肉棒は、熱くネバネバした白濁液を噴く――身体が欲しているのは、ソレだ。悦びの果てに牡が噴き出す、煮詰まったように濃厚な精液。

咽ぶほどの精臭を予感して、逆さになった背筋が早くも捻れた。羆に犯された尻穴が窄

み、うねる直腸が男根を搾る。虎の淫棒を呑み込んだ膣穴はいやらしい蠕動を強め、愛蜜に濡れた肉襞を小刻みに震わせて、硬い突起を生やした肉棒にプチュプチュと小さな口づけを繰り返す。

「こ、これは、たまらぬっ！」

低く吼えた虎が、突き込みを強めた。淫茎に生えた肉棘がミチミチ膨れ、硬さを増して、巫女姫の膣穴を荒々しく掻き回す。

「もぁ、ン……めぷぁっ！」

激発する快感に打ち抜かれ、猿の肉棒を思わず吐き出してしまうリルフィ。

「や、やだ、オチンチ、ンぅうっ！　もっともっとおしゃぶりするの、もっともっと、もっともっとぉおっ！」

アモッ！

牡肉から離れてしまった唇が耐えられないほど淋しくなり、すぐに新たな肉棒を咥えた。今度のソレは狼のモノだったが、そんなことは関係ないし、蕩けた頭では分からない。

分かることはただひとつ、赤々と輝く淫棒をぬっちょり濡らした、生温かな粘液。

――むちゅ、ちゅじゅるっ！

味蕾に染みる牡の味を頼りに、唇を尖らせて懸命にしゃぶった。舌を伸ばして裏筋を舐め上げ、尖端を咥えてチュウチュウ吸う。

（あはぁ……美味、しぃ……！）

牡の粘液に濡れた口端が淫らに綻ぶと、グッポグッポと抉られている膣穴が粘膜花弁を震わせて鋭く絞れた。捲れ返る壺口から噴き出す愛蜜が真っ赤に膨れた淫核を濡らして割れ目から溢れ出し、羆の精液に大きく膨れた下腹を垂れて、上衣を締める帯を濡らす。

「ほほう、コレはよい！　いいのか、猿ども。こんなに具合のよい穴を我らに譲って」

長い舌をダラリと垂らした狼が、プチャチュパと音を立てているリルフィの唇に淫棒を擦りつけながら訊いた。鋭い鈎爪が巫女姫の上衣の肩を踏み、白布を引き裂く。

「構わぬ構わぬ。儂らにはちと、刺戟がつよすぎるわい」

手を振って応えた猿たちは、立ち上がった虎のうしろ脚を回り込んだ。突き込みに合わせてタプンタプンと跳ね踊っている大きな乳房の周りにいやらしい視線を注ぐ。

双穴に渦巻く悦びに共鳴し、茹だったように紅い双球だ。汗を滲ませた柔肌は水から上がったばかりのようにしっとりと輝き、湿った音を立てて打ち当たる乳谷からは甘酸っぱい牝香の滴が飛び散っている。尖端の紅い肉豆はピンピンに張り詰め、いまにも弾けてしまいそうなくらい硬く痼り勃っている。

「肉がみっちり詰まった、よい乳じゃのう。これほど激しく揺れておるのに、ちっとも形崩れしておらぬ」

笑った猿が手を伸ばし、跳ね踊っている肉釣り鐘の頂点を押さえるように掴んだ。

「ぷぇっ⁉　にゃ、にゃふぅう――っ⁉」
鑢（やすり）のようにザラザラとした手指に乳肌がしごかれ、柔肉に蓄積していた淫悦が一気に膨れあがった。乳肌に刺さる爪は硬いが、その痛さもいまは気持ちイイ。美しい丸みに甘酸っぱく香る汗が噴き出し、裏側から炙られた乳暈が縁を際立たせてプクッと盛り上がる。
（む、胸が、胸がぁあっ！　あ……あ⁉　お、お尻も、アソコ、もぉおっ⁉）
悦ぶ乳房に共鳴し、犯されている肉穴がさらに感度を増した。芋虫のように蠕動する羆の男根に愛撫された直腸が燃え、肉イボを生やした虎の淫棒にグボボ、グボボ、と抉られている膣穴には熱い波が次々と湧き上がる。
「おほっ！　指が押し返されるわ！」
乳肉に手をかけた猿が嬉しそうに笑うと、ほかの猿たちも競うように手を伸ばした。老人のように皺だらけの手指に瑞々しい乳肌が覆い隠され、力強く揉み回される。
「うぅ、ああ、ら……らめぇえっ！」
喰い込む指先に乳肉が歪められ、擦りつけられる掌に乳肌がしごかれた。細長く節榑立った指の間に桜色に染まった柔肉がムニュッと絞り出され、あるいは乱暴に揺すられ、あるいはしつこく強く揉み込まれ――。
猿の手指は人間より長細く、万力のように強かった。
「やぁあ、やぁああンッ！　おっぱい、おっぱいが……蕩けちゃ、うぅうっ！」

触れられた場所に淫熱が膨れあがり、双球が煮え滾る。愛撫された乳腺にフツフツと新たな乳液が湧き上がり、出口を求めて乳暈の裏側に迫り上がった。胸丘の先に紅い小円が縁を際立たせて盛り上がり、その中央にそそり勃つ乳首が痛いほど硬く膨れあがる。

「ヒヒヒ、胸を弄られて感じておるわい。見ろ、この豆を」

「あ……ひぃンッ！」

硬い指先に軽く抓まれただけで、乳首に凄まじい感覚が炸裂した。真っ赤に灼けた長い針を、乳頭から乳奥へツウッと差し込まれたような――熱い衝撃は肉釣り鐘の中で反響し、増幅して、双球全体が淫核にも等しい性感帯になってしまう。硬く痼った乳首を抓まれ、尖端から根本へシュッシュッとしごき降ろされると、大きな乳房全体に網目のように張り巡らされた乳腺に沸騰した溶岩が溜まる。

「はぁう、はぁ、ぁああ、ぁああァアア――ンぷぉッ⁉」

喘ぐ唇に狼の肉棒がねじ込まれ、生臭い肉の塊に口腔が占拠された。舌を圧し潰す肉塊はミチミチ軋み、中に溶岩が詰まっているかのように熱い。

左右に伸ばした腕の先、ギュウッと握った手の中では、猪の淫茎が強張っていた。親指に絡みついた尖端が頻りにうねり、牡の匂いを含んだぬめりが掌に粘り着く。

「もぷ、ン……めぁあっ！　いひ、いひぃいっ！　お尻、おみゃんこ、いィイッ！　お口も、手も、ンぇぁあ、ンぷぉおっ！」

狼に犯された口から涎を垂らし、ビクン！　ビクン！　と痙攣するリルフィ。
身体のあちこちから込み上げてくる快美な衝撃に意識が揉みくちゃにされて、どこが本当にイイのか分からない。牡肉に触れている柔肌はもちろん、上衣に擦れている場所も、微風に嬲られているだけの肩や背も、獣たちの熱い鼻息や硬い毛に撫で回されている太股や脛も――ビンビンと感じて意識が白く掠れていく。
「おお、おお、いい声じゃ」
「御褒美に、オッパイもよくしてやろうかのう」
キシキシ笑った猿たちが、亀頭の目立つ細長い淫棒をそそり勃たせて腰を突き出した。紅い牡肉が擦りつけられたのは、桜色に染まって奔放に跳ね踊る乳房。茸の笠に似た肉瘤が乳首を揉み込み、乳暈に先走り汁を塗りつける。
「お、おっぱい、おっぱ、いぃィイイッ！　おっぱいが、おちんちんに揉まれて、おっぱいが、擦れ合って……イィ、イィ、イィイ――ッ！」
乳房に膨れあがる快悦に身体が捻れ、悶えた。男根を呑み込んだ肉穴が締まり、淫棒を掴んだ手指に力がこもる。射精を予感した女体が、淫らに反応してしまうのだ。
昂る牝に応じるように、獣たちの肉棒もムクムクと膨れあがった。
芯に煮え滾った溶岩が充満する。腰の律動が激しさを増す。
「ぁあ、あぁ、ぁあぁっ!!　来て、きちぇきちぇ、きちぇぇえっ！　わたしに、あちゅい

の、いっぱいいっぱい、ダシてぇぇえええ――――ッ！」
ビュクッ！　ビュパッ！　ビュパパッ！
ビュルルッ！　ビュルッ！　ドピュピュッ！
膣穴を犯す淫棒が、双球に擦りつけられていたいくつもの男根が、たおやかな手指でしごき立てていた肉棒が――大量の白濁液を一斉に噴いた。
「は、あ、ぁあああひぃいい――――ッ！」
膣奥を打つ奔流の激しさに、春声を張り上げて鋭く反り返るリルフィ。
頭の中に眩い光が爆発し、遙かな高みへ吹き飛ばされて――ぴゅ、ぴゅぴゅ！
プッシャァアアッ！
猿の淫棒に揉まれた乳房の先から白い乳液が迸り、仰向いた股間からは小便が噴き出した。細管を走り抜ける液体に淫核や乳首が内側から責め立てられ、めくるめく絶頂に心地よい余韻を添える。
白魚のような細指に搾られた猪の精液はゆったりした袖口に飛び込んで腕を濡らし、二の腕にねっちょりと粘り着く。乳房に擦りつけられていた猿の肉棒は紅い乳首に向けて白濁液を迸らせ、放物線を描いた滴が揉み合う乳谷にベチャベチャと降り注ぐ。
喘ぐ口には狼の精液がビュク、ビュク、と注がれて、的を外れたダマは頬から瞼、こめかみへ、ぬめり光る粘液の筋をつける。

（い、いいぃ……いいよぉぉ……あちゅいのが、いっぱい……こんなに、いっぱい……）

膣奥に迸った虎の精液は子宮頸管を押し退けて、子室の中まで流れ込んできた。ネバネバとした熱さがヘソの下に充満し、飢えていた牝の本能が満たされる――と。

「ふぁ、ああ……うっ⁉　ぐ、ぇぽっ！　げほっ！　げほっ！」

喘ぐ喉の奥から白濁液が溢れ、唇を乗り越えて頬を濡らす。狼の淫棒から迸った精液ではない。腹が膨れるほどに注ぎ込まれていた罷の精液が、喉を遡ってきたのだ。

「う、げぇぇ……げへほっ！」

咳き込んだ途端、白く濁った大きなダマがこぼれ出た。気道に入り込んだ粘液は鼻から噴き出し、鼻水のように垂れる。

熱い粘液に喉を塞がれ、息苦しい。

なのに仰向いた頬はうっとりと蕩けたまま、焦点を失った瞳がユラユラ揺れて、意識は高みに漂ったまま。

全身に粘り着いた精液の熱に理性が蕩け、濃密な精臭に頭の芯が痺れている。

ズル、ズル――ぬぼちゅ！

肉棒が引き抜かれ、逆さになっていた身体が地に落ちた。捲れ返った膣穴から白い粘液が溢れ出し、弛みきった尻穴からはコポ、コポ、と大きなダマがとめどもなくこぼれ――しどけなく開いた太股の間に生臭い水溜まりが広がる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/